夕虹

福岡市城南区　　荒木　巍

我が国は、憲法の不戦の誓いを破ることなく、終戦後５０年、平和を守り通すことができたことは、本当に嬉しいことである。

太平洋戦争がいよいよ熾烈になり、サイパン島も玉砕し、神風特攻隊が出撃し、東京・大阪が空襲を受ける。そうした逼迫した不安な情勢の中に、我々国民は昭和２０年を迎える。

そうしてその２０年の１月１５日、私は召集令状を受け取る。出頭先は広島宇品の暁２９４０部隊である。暁部隊は船舶部隊であるが、そこには陸軍唯一の暗号教育隊があり、私はそこで暗号教育と訓練を受けた。一定期間の訓練がすむと全戦線にわたり、その各部隊本部の暗号要員として、それぞれ配属されるのである。そして、その範囲はアッツ、キスカ島より、タラワ、マキン島にまでおよんだ。

私は福岡に新設された暁２９４８部隊に配属が決った。そして４月末、すでに部隊本部は福岡洲崎の海岸近くに本拠を定め、設営も終っており、吾々暗号班も隊長以下１３名、その隊へ加わり部署に付いたのである。

部隊長は日露戦争の生き残りという板倉三郎大佐である。大きな眉、鋭い眼光、そして見事な髭をたくわえた偉丈夫で、皆から髭の部隊長と呼ばれた。そして次官の菊池少佐はじめ連隊の将校や下士官がしっかり守備を固めた。そして暗号班も早速任務につき、待ち受けていた暗号電報の受理、解読、発信等忙しく仕事を処理する。電報交信の状況により敗戦の色が次第に濃くなりつつあることも推察出来た。

硫黄島も玉砕し、史上最大といわれる戦艦大和が沖縄へ向け特攻出撃したが、米艦載機の猛攻を受けて沈没、壮絶な最期であったという。皆大きな衝撃を受ける。

そして６月１９日夜、福岡市は遂にＢ２９の大空襲を受ける。マリアナ基地から発進したという２２１機のＢ２９の大編隊が、まだ空襲警報にもならない中に、その魔物のような姿を福岡上空に現す。焼夷弾の雨が降る。ザーッという音と共に火柱が上がり、見る見る街は火の海となる。照空灯が交叉し、ドドドッと高射砲が轟く。那珂川を隔てた向う側の奈良屋、大浜地区は、見る間に火の手が広がり、猛火が空を焦がしほとんどの家が焼き尽されたという。そして遂に味方の飛行機は姿を現さなかった。部隊の建物は幸い被害を受けずに済んだが、土居町の十五ビルでは、地下室に待避した人達がシャッターが開かなくなったため脱走出来ず、６０余名の人が焼死するという惨事になり、痛ましいことである。

この１９日の空襲の後、人心がすっかり動揺し、本土決戦のことが話し合われたり、敵艦隊九州上陸のデマがしきりに流された。

梅雨の雨で兵舎の畳に蚤がわいたり、食器が猛宗竹を輪切りにしたものなので、かびが生えたりで、環境はあまり衛生的でなかった。

私は６月末ひどく下痢したので、疑似赤痢と診断され、西部軍の病院に送られることになった。

そこは舞鶴城址の木立のあたりに、古い建物を利用して設けられた隔離病棟であった。私は検査らしい検査もされないままその病室に入れられ、赤痢患者の中に組み入れられてしまった。その病棟の中では赤痢が猖獗を極めていた。呻き声が聞こえる。消毒薬の匂いがする。血で真赤になった毛布がドラム缶に漬けてある。下半身むき出しの患者が、便所に行くため廊下を這ってきたが、ううッと呻いてばたりと倒れる。手を添えてやっと立ち上がらせる。ここはまるで野戦病院みたいだと思う。陽の落ちる頃また一人の兵士が搬送されて来た。唐津の部隊からだという。

この日与えられた食事は、アルミの食器の中に重湯と小さな梅干し１個であった。

その夜は奥の重症者の部屋から、何ともいえない呻き声が聞こえて、きてなかなか寝つかれなかった。

翌朝早く、慌ただしい足音が聞こえたが、重症者の一人が明け方息を引きとったという。皆暗い顔をして黙っていた。

それから蒸し暑い病院の中で、息詰まるような苦しい毎日であった。

空に弦月の出ている蒸し暑いある夜のこと、隣のベットに寝ている伍長が私に話しかけてきた。ものを言わないと、やりきれない気持ちだったのかもしれない。伍長の話によると、Ｂ２９の空襲のあった後、西部軍の将校達によって、捕虜が日本刀で処刑されたというのである。そしてその場所はすぐそこの崖の下あたりだという。私はその話を聞いて、流石に慄然として、二の句が告げなかった。

私はその夜もまた寝つかれぬまま考えていた。無差別爆撃、処刑、戦争は人間を狂気にする。そしてその戦争は人間の傲慢が引き起こしたもの、その報いは畢竟人間自身が負わなければならない……。

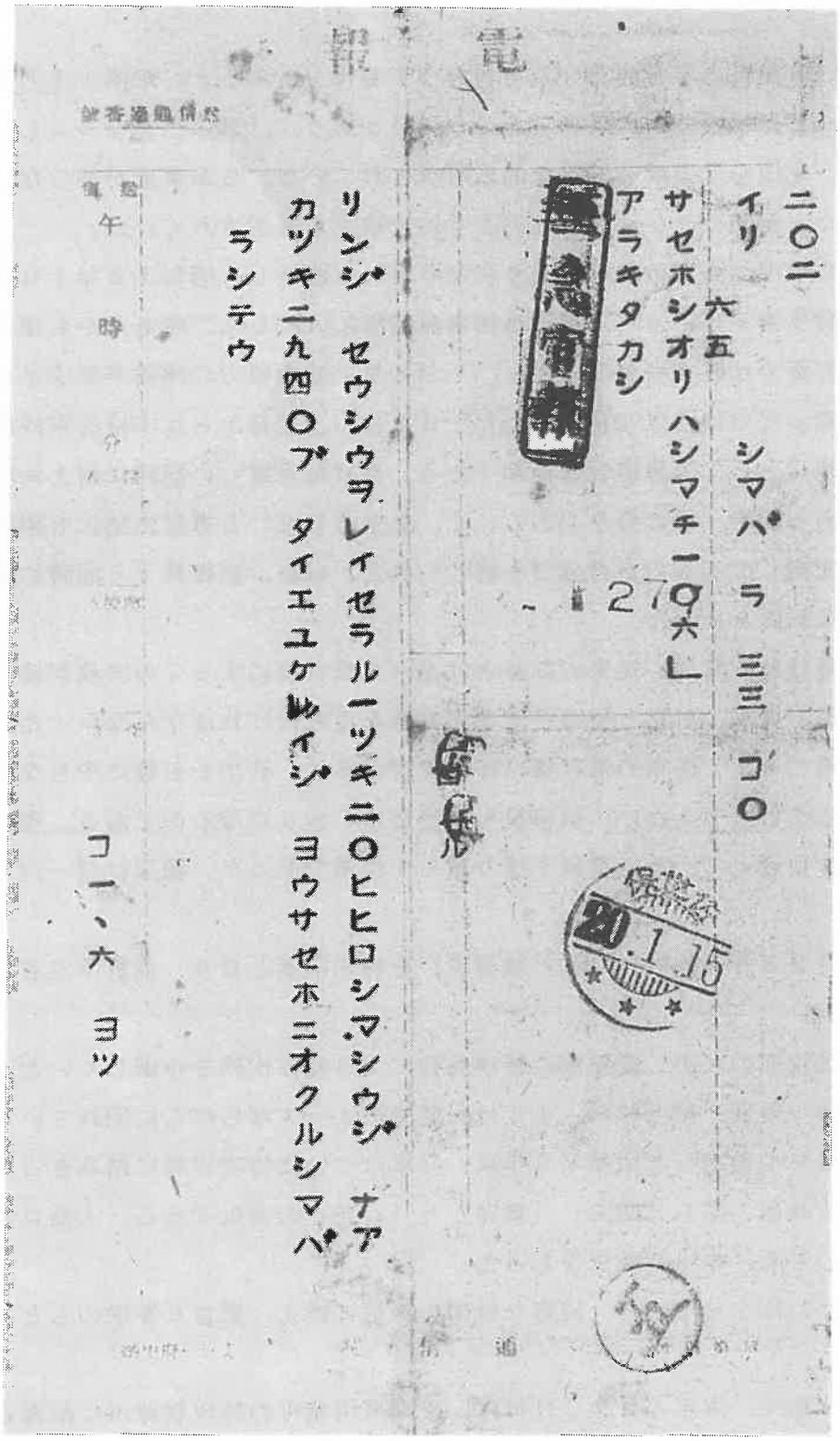
それから２、３日して名前を呼ばれる。「検査の結果、菌が出ていないので退院してよろしい」と申し渡される。パアッと目の前が明るくなったような気がした。入院して１３日目、私は生きて帰れることが不思議な気持ちであった。そして残っている人達のことが気になり、振り返りながら西部軍の営門を出る。

帰隊してみると、部隊の中は何となくざわついて皆落ち着きのない様子であった。沖縄が遂に全滅したことを聞く。

８月になる。そして８月６日、突然広島に新型爆弾投下の報が入り皆愕然とする。続いて８月９日、長崎にも原爆投下、そしてソ連軍参戦国境突破の報も入る。そして誰もが、原爆の威力というものを知らされ、事実上日本はこれ以上の戦争は無駄であることを、認識せしめられたのである。

８月１５日正午、一同営庭に整列、天皇の戦争終結の録音放送を聞く。感度が悪くて聞え難かったが、涙を流す者、放心状態の者、ただ黙ってうつむいている者等、それぞれであったが、

暑い営庭は不思議に静かで、庭隅に咲いている夾竹桃の赤い花が印象的であった。

それから間もなく、私達の部隊も解散の日が来た。「……私はこれから郷里へ帰って農業をする。君達もこれから困難を乗り越えて新生日本のために尽くしてもらいたい」。髭の部隊長は大きな眼をしばたたきながら、こう別れの挨拶を述べた。

街の空には未来の平和を暗示するかの如く、夕虹がうっすらとかかっていた。